

ジャンボコッコの伝記

さねとうあきら 作
長谷川知子 画



小学館の創作児童文学シリーズ3

ジャンボコッコの伝記

さねとう あきら 作

小学館 1979

144P 215mm NDC 913

ジャンボコッコの伝記

定価・七八〇円

一九七九年 月 十日

初版第一刷発行

一九七九年七月二十日

初版第四刷発行

著者・さねとうあきら

画家・長谷川知子

発行者・相賀徹夫

発行所・株式会社 小学館(〒一〇〇)

東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一

電話・東京〇三(三三三〇)五五四〇(編集)

五三三三(製作)五七三九(販売)

振替・東京ハ一〇〇〇

印刷所・図書印刷株式会社

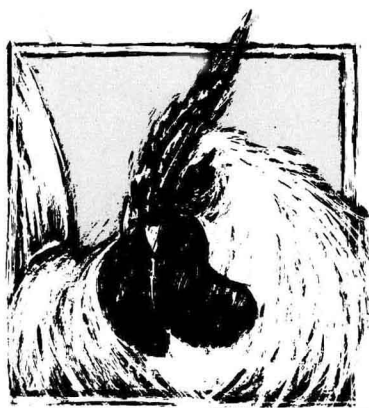
＊製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。

＊本書の内容の一部または全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めてください。

ジャンボッコの伝記

さねとうあきら 作

長谷川知子 画





装幀デザイン 中野博之

もくじ

1	こわい約束 やくそく	6
2	ブドウ棚 だな の下で	23
3	ジャンボ空をとぶ	41
4	ニワトリの結婚 けっこん	60
5	奥さん競争 きょうそう	78
6	ねむり病	96
7	勇者 ゆうしゃ の死	116
	おわりに 伝記 でんき のつづき	136
	あとがき	142

さねとう あきら

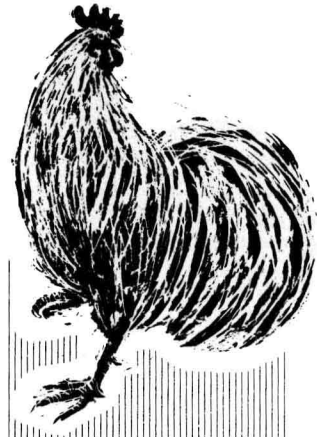
一九三五年、東京都に生まれる。早稲田大学演劇科中退後、児童劇や教育文化映画のシナリオを執筆。七二年、「地べたっこさま」で児童文学者協会新人賞、野間児童文芸推賞作品賞を受賞。主な作品に、「ゆきこんこん物語」「かっぱのめだま」「六べえだぬき」「わらいのおかみ」「おこんじょうるり」「赤いシカの伝説」など。

住所／埼玉県所沢市若狭一―二九七四

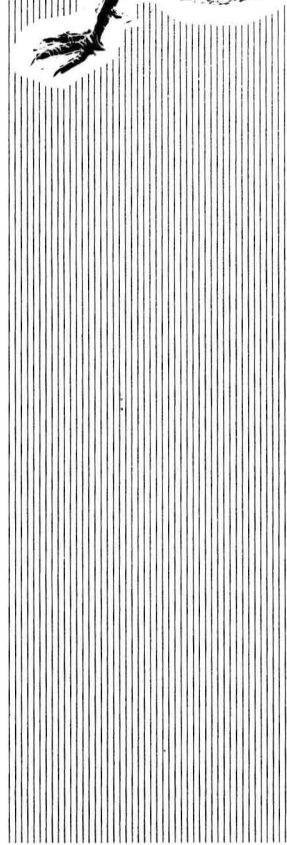
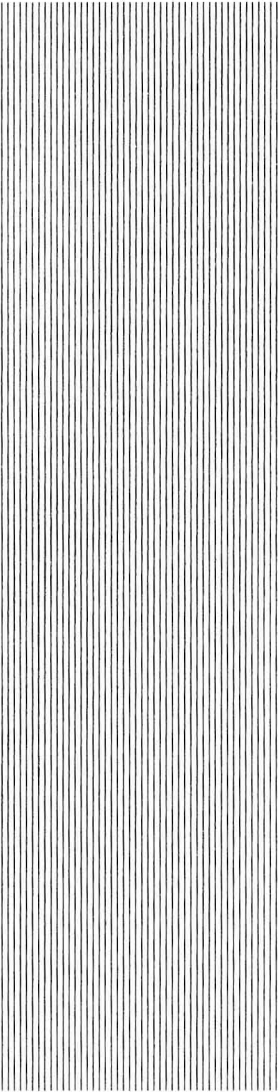
長谷川知子（はせがわ ともこ）

一九四七年、北海道北見市に生まれる。武蔵野美術短期大学商業デザイン科を卒業。児童出版美術家連盟会員。主な作品に、「ボタン貝船の兄弟」「先生のおとおりだい！」「兎の眼」「ねこねこねこおまえはどこだ」「かくれ里へどうぞ」「おかあさんだいきらい」など。住所／東京都調布市西つつじが丘

一―二三―七―四〇二



ジャンボッコの伝記



1 こわい約束

1

四月終わりの学級会がっきゅうかいのときだった。

飼育委員しいくいをやっている井上いのうえますみが、会のはじまるのを待ちかねたように、さっと立ちあがった。

「飼育小屋のジャンボッコが、とうとうころされることにきまつたんだって……。あたし、どうしても助けてあげたいの。そこでみんなに提案ていあんするんだけど、六年四組であのニワトリを飼うかことにしたらどうか、とおもうんです……」

いつもはピンク色のますみのほっぺたが、このときばかりは白っぽく青ざめていた。それが事ことの重大じゅうだいさをおしえていた。

「ジャンボッコをぼくたちの組で飼うって、どういふことかな。学校でころすつてきめ

たことなんだろ」

りくつ屋の大谷信高が、もそもそ席を立った。

「だから、あたしたちが飼うっていわなきゃ、ころされちゃうのよ。職員会でできたことなんだもん」

ますみの横の席の、福原みかがいきりたった。みかも飼育委員だ。ますみと相談して、ジャンボを自分たちで飼うという提案を準備した仲間だ。

「職員会できまったんなら、もうしょうがないじゃないか。飼育小屋の動物は、学校全体で飼うことになってるんだろ。六年四組だけでニワトリ飼ったりしたら、おかしいよ」

信高は、のんびりしたいいかたで、りくつをこねた。こんなふうに、のろろ反対意見をいわれると、よけいじりじりしてくる。

「そんなら大谷くんは、ジャンボがころされてもいいっていうの！」

気のみじかいみかが、かみつきそうないきおいで、信高のことをにらみつけた。

「人間がころされるんじゃない。ジャンボコッコはニワトリだよ。オンドリは肉をとるために飼われているんだから、やっぱりころされる運命なんだとおもうけど……」

信高はばかにおちついていた。テストの成績はいつも一番の信高だけに、こんなふうに

いわれると、もっともらしく聞こえる。

「だけど、学校でニワトリ飼っているのは、ころすためじゃないだろ。あんなにでっかくしてやったのに、おしいよなあ！」

動物ずきの小川光弘おがみつひろが、つくづくもったいない、という顔をした。

「そうよ、ころしちゃうかわいそうよ。ニワトリだって生きてるんですもの！」

と、光弘に助けてもらって、みかたちもようやくいきおいをもらいかえたが、

「だけど、ジャンボを飼う人間だってかわいそうよ。あたしなんか去年きょねん、ジャンボに手を突つつかれて、まだ傷きずがのこっているんだから……」

木村京子きむらきょうこが、さも痛いたそうに手をひらひらさせながら発言はつげんすると、

「おれだって……」

「ほんとに、すごいきかんぼだからね」

「あたしがはいっていくと、ググッなんてうなって、にらみつけるのよ」

「せっかくえさを入れてやっても、足でぐちゃぐちゃにしちゃうし……憎にくらしいったらありやしない」

男の子や女の子が、かわりばんこに立ちあがって、ジャンボの悪口わるぐちをいいはじめた。

これには、さすがの井上^{いのうえ}ますみや福原^{ふくはら}みかもいった。

たしかにジャンボコッコは、手がつけれないあばれんぼのニワトリなのだ。

いま、ころされそうになっているのも、飼育^{しいく}主任^{しゅん}の青柳^{あおやぎ}先生^{せんせい}にとびかかって、眼鏡^{めがね}をめちゃくちゃにこわしてしまったからだ。レンズのかけらが目にとびこみそうになって、あぶなく片目^{かため}が見えなくなりかけた青柳先生は、

「これ以上、あんなニワトリを飼っておくのは危険^{きけん}だ。子どもが、けがでもしたら一大^{いちだい}事^じ……」

と、ころす決心をしたのだそうだ。

飼育委員のますみやみかだって、なんべんジャンボのするどいくちばしで突っつかれて、泣きそうになったか知れやしない。

二人は四年生のときから、ずっとジャンボのようすを観察^{かんさつ}してきたが、ヒヨコのジャンボが飼育小屋に入られたばかりのころは、チャボの夫婦^{ふうふ}といっしょのおりで、えさをもろうとき、チャボに突っつきまわされてピーヨピーヨと鳴^ないていた。

ところが、ほんのひと月かふた月たつうちに、めきめきヒヨコのジャンボのからだは大きくなり、生まれつき負けずぎらいの気の強いニワトリだったのだろう、いつの間にかチ

ヤボの夫婦を突っつきまわして、えさ箱のまわりから追いちらすようになったのだ。

——ウフフ、チビのくせにやるじゃない。チャボがいじわるするから、しかえしされてるんだわ。

と、はじめのうちはますみたちも、きかんぼの若鳥わかどりのほうを応援おうえんしていた。

が、血がにじむくらいチャボ夫婦を突っつきまわして、おりのすみっこでもう動けなくなってしまうても、

——コウコッコ、クオ、クオ！

と、けたたましい叫びをあげながら、くりかえしくりかえしおどりかかるのをやめないジャンボコッコを見ているうちに、そういう残酷ざんこくさがやりきれなくなった。

自分の羽とチャボの羽とで、地面が白くなるくらいあばれるって、完全にえさ箱をひとりじめしてから、

——クオー、クオー、コッコッコ！

と勝利しょうりの叫び声をあげ、ジャンボはおりの中にえさをまきちらすようないきおいで、ガツガツ食事をはじめ。そのするどい目は、一かけらでも仲間たちに食べさせまいと、油断ゆだんなくチャボ夫婦にそそがれていて、かわいそうに飼育小屋の先輩せんぱいだった二羽のニワトリは、

金網^{かなあみ}にからだをこすりつけるようにしてちぢこまるばかり……。

——これではチャボたち夫婦が飢^うえ死^じにしよう……。

ということ、以前^{いぜん}ウサギを飼^かっていた、ちいさな鉄^{てつ}のおりにジャンボを入れて、チャボたちとひきはなすことにしたのだが、それでも食事のときになると、自分のえさ箱にちゃんとえさを入れてもらったくせに、

——クオ、クオ、コッコ！

と、やかましくわめきたてて、チャボたちにえさを食べさせまいとした。

これではチャボたち夫婦だってノイローゼになってしまふだろう、と青柳先生^{あおやぎせんせい}が心配^{しんぱい}して、ずっとはなれたべつのおりにチャボをうつすことにしたのだが、いじめる相手がいなくなる、こんどは人間たちにするどいくちばしを向けるようになったのだ。

「ニワトリにだって、いろんなのがある。おとなしいのいれば、気^きのみじかいのいいるが、それに接^{せつ}してやる人間の気持ち^{きもち}しだい、どうにでも変^かわるもんだ。動物は正直^{しょうじき}だからね、人間の真心^{まごころ}を見ぬくものさ」

と、福島^{ふくしま}県の農家^{のうか}に生まれた青柳先生^{あおやぎせんせい}は、飼育委員^{かういくゐい}にいつもいつてきかせていた。しかし、そういったはずみに、おもいきり指先^{さき}をジャンボのくちばしでえぐられて、

「ちきしょう、人の気も知らないで、ひねくれたやつもいるもんだ」

青柳先生は、ちゅうちゅう指をしゃぶりながら、ジャンボコッコをにらみつけなければならなかった。まるで自分の真心を突きさされでもしたように、しぶい顔だった。

——コケコッコウ！

ジャンボは、さもばかにしたように大声をはりあげた。そのすまし顔を見ると、青柳先生でなくともくやしくなった。

——おれには真心なんて通じないのさ。

そういつているみたいだった。

2

「井上^{いのうえ}さんの意見には反対^{はんたい}がおおいようです。四組では飼^かわないことにきめてもいいですか？」

司会^{しかい}の野瀬^{のせ}浩二^{こうじ}郎^{ろう}が、身をのりだした。このまま、ジャンボの悪口^{わるぐち}をいわせておくと、いつになっても終わりそうになかったからだ。

「ジャンボをころしたら、だれが食^くうのかな。先生たちが食^くうのかな」

そのとき、ますみのうしろの席で、意見だかひとりごとだかわからないことをいいだした男の子がいる。吉田猛夫だ。

「だれが食べるもんですか。土にうめてお墓をつくるのよ！」

すると、猛夫のとなりの席の浅井房子が金切り声をはりあげてくっつかかった。日ごろ、房子と猛夫は仲がわるい。二人は三年のときからずっと同じクラスにいるが、すぐに笑ったり泣いたり、にぎやかな性格の房子とあべこべに、猛夫はいつもふてくされたようにむっつりしている。むっつりしているだけならまだいいが、猛夫が学校のうらの沼でつかまえてきた、ガマ蛙やザリガニやトカゲなど気味のわるい動物を、むやみに教室に持ちこむのが、房子にはがまんならない。六年生になったばかりの四月のはじめにも、給食の時間中に、ガマ蛙が房子の足もとにはいだしてきて、大さわぎになった。

「まだ冬眠してたやつをつかまえたんでね、寝ぼけてやがんのさ、こいつ……」

猛夫は手づかみにして、ガマ蛙をポリバケツに放りこんだ。

「どうして、しっかりふたをしめなかったのよ！ わざとずらしておいたんでしょ！」

と、房子はいきりたったが、

「ばかだな、きつちりふたをしめておいたら、死んじゃうじゃねえか。ガマだって息はし

てるんだ」

猛夫はガマをつかんだその手で、給食きゅうしょくのパンをちぎった。

それを見るなり、房子はゲーッと吐きはそうになって、その日の給食をほとんどのこしてしまつた。

こういうことがあつたものだから、猛夫がジャンボを食べる話をしはじめたとたんに、いつも肉屋にくやさんの店先で見かけるピンク色のニワトリの肉や、ドス黒い血の色をしたモツなどをおもいにかべて、房子は鳥膚とりはだが立つくらい気持ちわるくなつた。肉の中でもトリ肉は大きいだったからだ。

「ばかいえ。ニワトリを土にうめたって、バクテリアばくてりあが分解ぶんかいするだけさ。どうせ分解するなら、人間が食べて、ウンコにしてから分解すりゃいいじゃないか」

猛夫は大まじめだった。

「ゲー、ウンコだって……」

と、だれかがおどけた調子ちょうしでいったが、クスクス笑いがちよつとおこつただけで、教室の中はすぐにしーんとしてしまつた。いつもはめつたに発言はつげんしたことのない猛夫におしまくられ、クラスの空気もへんにまじめなものになつた。

「だれが食べても食べなくても、そんなことどうだっていいじゃないか」と、信高がはきすてるようにいった。「今日は、ぼくたちの組でジャンボを飼うか飼わないかの相談だろ」

「だからさ、おれたちの組で飼わなきゃ、ジャンボはころされるんだ」

今日ばかりは、猛夫もがんこだった。

「そんなこと、ぼくにいつてもしょうがないよ」

信高は、ムッとしてそっぽをむいた。

「そんなら、大谷、自分でころせよ。ジャンボの首しめて、自分で肉を食えよ。トリはころして食うためにあるんだろ」

ガタンと椅子^{いす}をけとばして、猛夫は立ちあがった。

信高は、ハッとしたようすだった。

——吉田くん、なかなかやるわね。

井上ますみは、にんまりした。房子と同じに、いつもふくれたようにむつつりしている猛夫に、あんまり親しみを持っていなかったますみだったが、このときばかりは猛夫を見なおした。食べるとかウンコだとか、気持ちのわるいことばかりいうけれど、ほんとうはますみと同じに、ジャンボッコを助^{たす}けてやりたいんだ。